



身近な自然に心を寄せて



園長 原田 幸子

天候が心配でしたが、無事に今週から水遊びを始めることができました。子どもたちは、水遊び用遊具を使っただけの水鉄砲や金魚すくいなどを楽しみ、開放感や水の心地よさを味わっています。園庭が無い中で、密集を避けながら、どのように水遊びを行うかを念入りに検討し、準備を進めてきました。4歳児クラスは1階のバルコニーで、5歳児クラスは児童館にご協力いただきながら屋上で、直径2メートル程のプールやたらいを使って遊んでいます。昨年、今年と新型コロナウイルス感染症対策のために、試行錯誤しながら保育や環境構成を行っている中で、職員の中に「アイデアを出し合う」という気風が生まれています。

自然との関わりにおいても、子どもたちの体験が豊かになるよう、工夫や努力をしています。5月に、一人の職員が自宅の庭にいたアゲハチョウの幼虫を園に持ってきました。その後、数日ごとに自宅から、餌となるミカンの葉を持参して、保育室で飼育を続けました。一時期は、サナギが黒くなり「もうダメかもしれない」とあきらめかけましたが、見事に羽化しました。子どもたちは、身近に起こった不思議で素敵な出来事に大喜びして、飼育ケースをのぞき込みました。羽が乾くのを待って、大空にチョウチョを放してあげるときには、「バイバイ!」「元気でね!」と言いながら手を振っていました。

玄関の飼育コーナーも子どもたちに大人気です。先日、ザリガニが脱皮し、帰りがけに見つけた子どもが「(殻と本体が) 同じ形だね」とつぶやきました。一緒にいた保護者の方も「本当だね」と、同じ目線で共感していました。

別の日の登園時、大切に飼育ケースを抱えた A さんが、「クワガタを連れてきたよ!」と、うれしそうに教えてくれました。遊びに行った公園で捕まえたクワガタを友達に見せてあげたくて、持ってきたのでした。飼育ケースの中を見せてもらおうと、土と葉っぱが丁寧に入れられており、保護者の方が「葉っぱの下に潜っちゃうんですね」と言うと、A さんも「隠れちゃうんだよ」と教えてくれました。

都会の生活の中での自然との関わりは限られたものですが、その中で感じたり、発見したりすることは貴重な経験となります。そして、一緒に感動したり、受け止めたりしてくれる人がいることで、知的な好奇心はさらに育ちます。現代社会において、環境問題が大きな課題となっています。未来を担う子どもたちに、環境に主体的に関わり、自然を大切にすることを育てていきたいと思いません。この夏は、親子で身近な自然に目を向けてみてはいかがでしょうか。